PROJECT

ゴミと物質性

文・写真
古谷嘉章

共同研究 ● 物質性の人類学（物性・感覚性・存在論を焦点として）（2011-2014）

ドゴンの屋敷はゴミだらけ

Laurence Douny は、The Materiality of Domestic Waste という論文で、西アフリカのドゴンの屋敷の敷地には、キビ殻や廃水や家畜の糞や、つぎに使うまで洗わない鍋や臭う残飯など、彼女には汚いゴミ（rubbish）としか見えないものが散乱しているが、それはドゴンの宇宙論的なリサイクル観にもとづけばポジティヴな価値をもつのだと論じている。もちろんドゴン社会でも屋敷外に廃棄すべき種類のゴミはあるが、あえて敷地内に放置されているゴミめいたものは、廃棄物ではなく、何らかのかたちでリサイクルされて再生する途上にある。「ゴミだらけ」は、ドゴンの人々にとっては、むしろ生命・生活・活力を意味する。それに対して、塵ひとつない「清潔な」敷地は、死を意味する不毛な空間なのだ。

物質をつねに「別のものになりつつある」と捉えるドゴンの物質観はそれ自体としても興味深いが、それはそれとして、この事例からもわかるように、「いつでもどこでも同じものがゴミであるわけではない」、「同じ社会のなかでも、あるモノが、ゴミでないものからゴミへ、ゴミからゴミでないものへと移り変わる」、そもそも「ゴミなる範疇は文化を超えて普遍的なものではない」。

物質世界の要としてのゴミ

物質的なものであるこの世界の「物質性」について人類学的に考察するにあたり、「ゴミ」は要のトピックのひとつである。私たち人間の社会は、いつでもどこでも、物質世界に由来する物質を素材として、それを加工したり、使用したり、摂取したりして生活を営み、その結果として生じたさまざまな物質を物質世界へと送り返している。そのなかの「不要で厭わしいもの」を（日本語では）「ゴミ」と呼んでおり、焼却したり、土に埋めたり、水に流したりして、視界から放逐して廃棄することによって、生活圏の（色々な意味での）秩序を維持することに努めている。しかしゴミになる、あるいはゴミになりかかっても、再使用・再利用・転用などのかたちで役割と意味を獲得して、再び生活圏へと戻って来るものも多々ある。それを輪廻転生と呼ぶにせよリサイクルと呼ぶにせよ、私たち自身の身体も含め、物質はすべからく生生流転の流れ（flow）のなかにある。「ゴミ」とは、物質にとって、確定した役目を一時的に離れている言わば「待命中」の状態であるが、その状態においてこそ、その物質の潜在的可能性が極大化しているとも言える。

したがって、ある社会において「ゴミとゴミでないものの境界」がどのようなものであり、どのようにして「ゴミがゴミでなくなり、ゴミでないものがゴミになるのか」に注目することによって、その社会の現実を構成している物質世界について知るための重要な手掛かりを得ることができる。このように「ゴミ」は、物質世界のなかで要の位置にあるのだ。

「ゴミと物質性」をめぐるさまざまな問題

以上の問題意識をベースに、本年度第1回の研究会（2012.5.12）では「ゴミと物質性」をテーマとして出席者全員が小報告をして、問題の広がりをあぶり出してみた。まず私が「土（地面）に穴を掘って埋める、そしてまた掘り出す？」という問いを起点に、地面に掘った穴に埋めるモノの三角形「ゴミと宝物と遺体」を、それぞれ、高レベル放射性廃棄物の地層処分、花咲か爺さん、三内丸山遺跡の埋葬を例にとって提案したのち、前述のドゴンの事例に加えて、生ゴミ堆肥作り、そして貝塚の貝と縄文土器を使ってのコンテンポラリーアートの事例などを紹介しつつ、「ゴミでないものがゴミになる、ゴミがゴミでないものになる」プロセスについて問題提起した。それを承けて、溝口孝司（考古学）から、直接的使用の領域を当面離れたモノを、あえて同じ場所に据え置きつづけた結果として形成される midden（塚）は、日常的に交流しつづけることが可能な対象として身近に設置された「生活世界のシミュラークル」ではないかとの見解が示された。つぎの秋山聰（西洋美術史）の報告によれば、聖母マリアのサンダルだとの言い伝えのあるモノなど、キリスト教の聖遺物がしばしば部外者にはゴミにしか見えないような物質であり、立派な聖遺物容器に収納されていることによって virtus すなわち神に由来する特別な力をもつ物質であると識別されるという仕掛けがある。つづいて松本直子（考古学）は、捨てられない学生時代のノートの話から始め、縄文人にとって「捨てる」というのは私たちにとっての「捨てる」とは違い、「埋めて見えなくする」のではなく、（物質的持続性において異なる）雑多なものを分別せずにまとめて積み上げつづけ、その結果として形成されたのが縄文時代の貝塚であるという話をした。それに対し、弥生時代になると貝を積み上げたりしないのでゴミの量も減少し、（溝口からも同様の指摘があったが）種類も減少し、私たちにとってわかりやすいゴミになってくるらしい。関雄二（新大陸考古学）からは、アンデス文明の形成期に見られる、神殿をどんどん大きくしていく「神殿更新」の工事についての報告があり、その際に壁の隙間を石材や土器や人骨や獣骨などありとあらゆる「廃棄物」で充填していく作業のなかで人々が得ていたであろう物質体験に注目することの重要性が指摘された。武井秀夫（文化人類学）は、パナマのクナの人々が住む珊瑚礁の島での「きれいに掃き浄められた広場」と対照的な「汚物が流れゴミが浮かぶ水辺」の話から始め、コロンビア・アマゾンのトゥユカの人々にとっての「捨てる」とは、キャッサバの芯にせよ、人間の骨にせよ、「他者性のカタマリのようなもの」を「あの世へ返してやる行為」なのだという解釈を示した。出口顯（文化人類学）からは、「言葉の物質性」という観点からゴミについて考えてみる試みとして、言葉の物質的かたちとしての文字を収めた「ゴミ箱」としての大学図書館、言葉の（ゴミならぬ）クズとしての余白や句読点、さら

には中島敦の『文字禍』に登場する「文字の精霊」を物質的なものとして捉えるという着想が示された。川田順造（文化人類学）からは、日本とモシとフランスを比較して、生活ゴミの捨て方を通して浮かび上がるそれぞれの社会の共同性のあり方についての話があったほか、「糞尿のリサイクル」をめぐって、江戸の汚穢舟（おわいぶね）、モシやバウレでの菜園や家畜飼養との結びつき、フランスの「溲瓶・おまる文化」の話にまで及んだ。（もちろん以上が報告内容のすべてではないし、文責は私にある。また当日は参加できなかったメンバーとして、鏡味治也、佐々木重洋、野林厚志、箭内匡、渡辺公三がいる）。

多方面に増殖したディスカッションについては紹介する余裕がないが、そのなかで色々なかたちで「身体（からだ）」の問題が出てきたので、つぎは「からだと物質性」でやろうということになり、7 月 28 日の研究会では、秋山聰に「西欧中近世におけるキリスト像の生動性をめぐって」、出口顯に「エンバーミングと記号化する身体」、武井秀夫に「からだを形作ることば」という演題で御報告いただいた。

「飛ノ台貝塚」（約 7000 年前の縄文時代早期）の「貝層と（戸外で調理を行う）炉穴」の復元展示（船橋市飛ノ台史跡公園博物館）。

「取掛西貝塚」（約 1 万年前の縄文時代早期）の貝層の剥ぎ取り展示。鹿角や土器片や石器も混在。同遺跡から猪の頭骨が意図して配置された状態で 10 数頭分出土した（船橋市飛ノ台史跡公園博物館）。

宝物としてのゴミ？

共同研究は起承転結の承の半ばを越えたあたりだし、ゴミの問題は、物質性を考えるときにつねに関係してくるテーマなので、結論めいたことを言うには早すぎるのだが、いくつかの興味深い共通論点を書き留めて置くことにしたい。第 1 は、貝塚のように、私たちにはゴミと見える物質をこれ見よがしに集積して顕示する行為のもつ意味である。それはある種の達成・豊かさ・威信を発信するものだろうが、かなり強烈な臭いも発散したはずである。第 2 に、生者がアクセスできるアーカイブあるいは外部メモリーとしての「ゴミの集積体」である。私たちの生活を通過したことで物質にチャージされた何ものかは、文字やデジタルデータによって完全に代替されうるだろうか？この文脈で墓地との比較は不謹慎だろうか？第 3 に、リサイクルの循環のなかにあることこそ物質にとっては自然で、そこから隔離されてしまうと、物質は生命を失って「死んでしまう」のではないか。装飾過多な容器に密封された聖遺物がもの悲しく見えるのはそのせいかもしれない。そして第 4 に、ふりだしに戻るが、ゴミはいつでもどこでも誰にとってもゴミであるわけではない。それはおそらく宝物についても同じことで、意地悪爺さんにはゴミでしかない瓦や陶片のほうが、花咲か爺さんの掘り出した大判小判よりも、考古学者にとっては宝物なのかもしれないのである。

【参考文献】

Douny, L. 2007. The Materiality of Domestic Waste: The Recycled Cosmology of the Dogon of Mali. *Journal of Material Culture* 12(3): 309-331.

ふるや よしあき

九州大学大学院比較社会文化研究院教授。専門は文化人類学。ブラジル・アマゾンを主なフィールドとして、憑依、土器、芸術、モダニズムなどについて考えてきた。著書に『異種混淆の近代と人類学』（人文書院 2001）、『憑依と語り』（九州大学出版会 2003）など。共訳書に、J. クリフォード『文化の窮状』（人文書院 2003）など。